

「連鎖交互とび」の特性に関する研究 —技能とコミュニケーションの関係について—

指導教員 橋爪 和夫
21121009 山田 朋子

1. はじめに

平成20年に行われた学習指導要領の改訂により、各教科で「言語活動の充実」が強調されるようになった³⁾。高橋は、「身体活動を中心にして行われる体育学習においても、思考・判断し表現する言語活動が重要な役割を果たしている。」⁶⁾と体育科における言語活動の重要性について述べている。

しかし、この「言語活動の充実」の強調によって、実際の体育授業においても話し合いなどの活動が取り入れられているが、そこでは体育の本質に結びつく話し合いが行われていない場合もあるとされている⁴⁾。これでは、どれだけ言語活動が活発に行われても、真の体育学習は成立しない。では、体育で本当に学ばなくてはならないものは何なのだろうか。

吉田は、体育や音楽、図工などの「技能教科」について、『技能教科』としての本来の学習は、技能の習得にあることは言うまでもない。⁷⁾と述べており、体育科における技能習得の学習の重要性について強調している。体育学習において、「言語活動の充実」はもちろん重要ではあるが、体育で最も重要視しなくてはならないものは、あくまでも「技能の習得」なのである。

これらを踏まえた上で体育授業を考えると、「言語活動」、すなわち、「言語的コミュニケーション」が、「技能」をより効果的に習得するために有効に使われるといった授業が理想的である。そして、そのような授業を行う手立てとして、適切な教材の導入が効果的であると考えられる。もし仮に、技能の習得を目指しながら、自然発生的に子ども同士の言語的コミュニケーションが生まれるといった教材が存在するなら、「技能の習得」と「言語活動」を両立させた授業を行うことが可能になるのではないだろうか。

そこで、本研究では、そのような授業を行うための適切な教材となり得る「連鎖交互とび」という運動に注目したい。その理由は、連鎖交互とびは仲間と関わって初めて行うことのできる運動であり、技能の習得には実施者同士による言語的なコミュニケーションが重要である⁵⁾という報告がされているからである。しかし、実際には連鎖交互とびの技能の習得と言語的コミュニケーションの関係性についての研究はなされていない。そこで、他の運動と連鎖交互とびの言語的コミュニケーションの内容を比較することによって、その関係性に関する特性について明らかにすることを目的とした。

2. 「教え合い」について

「言語活動の充実」が強調され、体育授業においても話し合いや教え合いといった活動が多く取り入れられているが⁴⁾、本来「技能の習得」に結び付いているはずの「教え合い」という活動では実際に技能と結び付いたやりとりが行われているのだろうか。ここでは「教え合い」について考えることとする。

まず、「教える」ということであるが、運動学の立場からは「教える」ためには原則的にはその運動の技能を習得していなければ難しいとされている。さらに、「教える」ためにはその運動についての知識や、「運動観察力」、「運動共感能力」が必要であるとされている^{1) 2)}。

つまり、その運動の技能を習得した者を「できる」、まだ技能を習得していない者を「できない」とすると、「教える」という行為は、「できる」から「できない」への一方通行でしかあり得ないということになる。さらに、この運動学の立場から言えば、技能を習得していない「できない—できない」同士にこの「教え合い」を成立させることは、不可能に近いと言っても過言ではないと言えるだろう。

以上より、「できない」者が主役である学校体育において「教え合い」を行うことは難しいと考えられる。しかし、本研究で扱う「連鎖交互とび」という運動は、「教え合い」を起こす特性を持った運動である可能性がある。その理由は、連鎖交互とびは複数で行うなわとび運動の一種であり、実施者同士がなわを介してつながっているため、技能の習得には技術的内容の言語的コミュニケーションが必要不可欠といった、双方の密接な関係が考えられるからである。もし、この運動が「教え合い」を起こすことが可能であれば、この運動は現在の学校体育における問題点に対処できる教材となるのではないだろうか。

3. 研究目的

本研究では、小学生を対象に連鎖交互とびとソフトバレーの授業での技能の習得過程における言語的コミュニケーションの内容を比較することによって、連鎖交互とびの技能の習得と言語的コミュニケーションの関係性を明らかにすることを目的とする。

4. 比較対象としたソフトバレーについて

連鎖交互とびの技能の習得と言語的コミュニケーションの関係性を明らかにするためには、同じように集団で技能を高め合い、技能の習得のための言語的コミュニケーションが活発に生まれると予想される運動種目と比較を行うことが望ましいと考えた。そこで、仲間とボールを落とさずにつなぎ合う、といった特性を持ち、高い前提技能を必要としないソフトバレーを比較対象とした。

さらに、ソフトバレーにおいて、連鎖交互とびと対応させるために、人数を2人に絞り、達成目標を「三段攻撃」に限定した。このように条件を設定すれば、運動中の学習者の役割が明確になり、技術的な言語的コミュニケーションも活発に生まれると考えた。そこで、本研究では、2人で三段攻撃の技能を高めることを重視した、三段攻撃を1プレーのみ行う「三段攻撃基礎ゲーム」を行うこととした。

5. 方法

(1) 実験の概要

小学生を対象に連鎖交互とびとソフトバレーの授業を行い、双方の授業において発生する言語的コミュニケーションの内容について調査を行った。また、実験協力者の技能の習得過程における会話や様子をICレコーダーとビデオカメラによって録音・撮影し、言語的コミュニケーションの内容を調査した。

(2) 対象と手続き

本実験は平成24年6月8日～7月17日の期間中、富山県O市立I小学校6年3組（男子18名、女子16名、計34名）を対象として行い、そのうち2ペア（計4名）を実験協力者とした。

なお、本実験は対象とする小学校の校長、対象学級の担任に承諾を得た上で行った。

(3) 実験内容

実験の流れは表1の通りであり、双方の授業を対応させて行った。

表1 実験の流れ

	時数	<連鎖交互とび>	<ソフトバレー>
第1次	1～2	試行期間	
第2次	3～6	2人ペアでの活動	
第3次	7～8	3, 4人グループでの活動	

なお、表1の流れで行った実験のうち、第2次の2人ペアでの活動を考察対象とした。第2次で行った内容と達成目標は表2の通りであった。なお、達成目標に達した時を技能習得時とした。

表2 第2次の内容と達成目標

	<連鎖交互とび>	<ソフトバレー>
第2次の内容	連鎖交互とびの練習	三段攻撃基礎ゲーム
達成目標	連鎖交互とび（20回連続）	三段攻撃（5回連続成功）

(4) 分析方法

分析は連鎖交互とび、ソフトバレーの双方の授業において生まれた実験協力者の言語的コミュニケーションの内容を、映像を参考にしながら採取した音声を読み起こすことで記述し、それらをA「技術的内容」、B「方法的内容」、C「情緒的内容」、D「その他」の4つに分類することによって行い、双方における言語的コミュニケーションの内容を比較した。なお、Aに関しては、自分のペアの実施に対するものをA-1、他のペアの実施に対するものをA-2として分類した。

6. 結果と考察

(1) 技能習得前における言語的コミュニケーションの分析

図1は、技能の習得時を基準として、双方の授業におけるペアAの技能習得前（約2分間）の言語的コミュニケーションを記述し、分類した結果を比較した結果である。また、技能の習得時を揃えるために、時間の表示を技能の習得時を0分00秒として実線で示し、習得の2分前を-2分00秒とした。

連鎖交互とび3時間目<ペアA> 6月13日 技能習得前				ソフトバレー5時間目<ペアA> 7月5日 技能習得前			
分	秒	A:女子(M)	備考	分	秒	A:女子(M)	備考
-2	8	1 いっせいで (回数に挑戦)	試技①	-1	47	1 (相手からのサーブ) (レシーブをあげる)	試技①
	2	2 1. 2. トントントン...			2	2 (トスをあげる)	
	3	3 (11回成功)			3	3 (スパイクを打つ)	
	4	4 あれ?	うまく交互に回る		4	4 (スパイク成功)	
	5	5 めっちゃ一緒になかったー? 今			5	5 えー入ったー?	
	6	6 うそーわからん			6	6 (相手: 入った入った!)	
	7	7 まあまあ一緒			7	7 いまーい! (スパイクをあげる)	
	8	8 わかった、おれ...		-1	39	8 おーやばい! これは両道のパターンか? おーやばい!	
	9	9 ちょまって			9	9 両道や!	
	10	10 もわからん			10	10 両道や!	
	11	11			11	11 両道や!	
-1	53	12 いっせいで (回数に挑戦)	試技②		12	12 (相手: ねー、10対10めざー)	
	13	13 1. 2. トントントン			13	13 え、え、やっちゃったきー	
	14	14 (完全に交互ではないが14回成功)			14	14 なんよだって? なったもん	
	15	15 えー続けた			15	15 へい!	
	16	16 (教師: よく覚えてるわ!)			16	16 はい	
-1	31	17 いっせいで (回数に挑戦)	試技③		17	17	
	18	18 (7回成功、後半同時とび)		-1	16	18 (友達の名前)いくよー	(相手の試技①)
	19	19			19	19 本気で本気で!	
	20	20 あー7回しか			20	20 (サーブを打つ)	
	21	21			21	21 (相手失敗)	
	22	22			22	22 あははは	
	23	23			23	23 あははは	
	24	24			24	24 東あまどんまいてことで	
	25	25			25	25 失礼すぎやー	
	26	26			26	26 失礼すぎやー	
	27	27			27	27 え、次こっちはやる?	
	28	28			28	28 (相手: 違うよ)	
	29	29			29	29	
	30	30			30	30	
	31	31			31	31	
	32	32			32	32	
	33	33			33	33	
	34	34			34	34	
	35	35			35	35	
	36	36			36	36	
	37	37			37	37	
	38	38			38	38	
	39	39			39	39	
	40	40			40	40	
	41	41			41	41	
	42	42			42	42	
	43	43			43	43	
	44	44			44	44	
	45	45			45	45	
	46	46			46	46	
	47	47			47	47	
	48	48			48	48	
	49	49			49	49	
	50	50			50	50	
	51	51			51	51	
	52	52			52	52	
	53	53			53	53	
	54	54			54	54	
	55	55			55	55	
	56	56			56	56	
	57	57			57	57	
	58	58			58	58	
	59	59			59	59	
	60	60			60	60	
	61	61			61	61	
	62	62			62	62	
	63	63			63	63	
	64	64			64	64	
	65	65			65	65	
	66	66			66	66	
	67	67			67	67	
	68	68			68	68	
	69	69			69	69	
	70	70			70	70	
	71	71			71	71	
	72	72			72	72	
	73	73			73	73	
	74	74			74	74	

図1 ペアA: 技能習得前（連鎖交互とび3時間目、ソフトバレー5時間目）

図 1 より、ペア A の技能習得前の双方の授業における言語的コミュニケーションは、2 分間においてどちらも活発に行われている様子がうかがわれる。しかし、その言語的コミュニケーションの内訳は、連鎖交互とびとソフトバレーでは大きく違っている。連鎖交互とびでは主に A-1 が、ソフトバレーでは B が顕著であることが読み取れる。

また、連鎖交互とびの A-1 の内容については、「33：ちがう同じやったよー」、「34：同じやったけー（同じだった?）」という直前の実施の評価といった、具体的な言語的コミュニケーションが行われている。これは技能の習得に直結した内容であると考えられる。その他、ペア B の技能習得前、ペア A、ペア B の技能習得後についても同様に分析したところ、基本的に同じ傾向が見られた。

（2）考察のまとめ

実験から、連鎖交互とびでは技能の習得場面において、技術的内容の言語的コミュニケーションが頻繁に行われていることがわかった。そのことから、連鎖交互とびでは技能の習得には技術的内容の言語的コミュニケーションが必要不可欠であるといった、双方が密接に結びついた関係性が示唆された。

また、その言語的コミュニケーションは「できないーできない」の関係にある実施者同士でも行われており、技能の習得過程において、真の「教え合い」が実現可能であることも考えられた。

さらに、この技能とコミュニケーションの関係性や「教え合い」の可能性は、連鎖交互とびの、できない者同士が同時にできる瞬間を迎えるという、「粗形態発生の同時性」に起因しているのではないかとということが考えられた。また、この「粗形態発生の同時性」という特性は他の運動種目にはない連鎖交互とび特有のものであることも考えられる。

以上のことから、連鎖交互とびは体育における本来の学習である「技能の習得」と「言語活動」を両立させた授業を行うことのできる教材として大変有用であるということが明らかになった。

<謝辞>

本研究を進めるにあたり、ご指導、ご協力していただいた先生方、並びに長期間にわたり実験をさせていただいた I 小学校の先生方、児童の皆様は心より感謝いたします。

<主要参考文献>

- 1) 金子明友・朝岡正雄：運動学講義，大修館書店，1990.
- 2) 金子明友監修・吉田茂・三木四郎編集：教師のための運動学，大修館書店，136，1996.
- 3) 文部科学省：小学校学習指導要領解説総則編，東洋館出版社，2008.
- 4) 中野正明・井上美代子・中西幸太・今枝春美：コミュニケーション能力を高める体育学習の在り方，川崎市総合教育センター研究紀要第 22 号，81-96，2007.
- 5) 佐伯聡史・池田優介：新しい教材としての「連鎖交互とび」の有用性について，富山大学人間発達科学部紀要第 5 巻第 2 号，67-73，2011.
- 6) 高橋健夫：体育における「言語活動の充実」の展開方向，体育科教育第 59 巻第 11 号，大修館書店，14-18，2011.
- 7) 吉田茂：日本体操競技・器械運動学会第 26 回学会大会資料，2012.